

論文内容の要旨

専攻名 (課程名)	多文化社会学専攻 (博士前期課程)	氏名	鄧 全
題名	観光地化された華僑に旧居についての研究：—晋江における梧林古村落の事例を中心に—		
<p>本論文は中国福建省晋江県の梧林という村の観光開発を研究し、観光開発に至るプロセスと、または華僑に関するイメージ、物語が「観光資本」への価値転換のプロセスを明らかにする。華僑は一般的に中国以外の地域に移住し、中国の国籍を持つ人を指す。2012年の中国中央政府の政策の発足をきっかけに、梧林が華僑のふるさととして華僑の旧居と物語を中心とする観光開発が推進されていた。先行研究は日本のまちづくりと中国の観光開発の例を取り上げ、強く帰属意識を持つ地域住民の立場から論じる場合が多い。または観光開発の過程に伝統の保護と具体的な影響などを示唆している。観光開発に至るまでプロセスと、観光地に構築されたイメージ、文化の変容などの様々な現象に対し、その原因に関する研究が少ない。故に本論文は梧林という村を具体例に、政府が主催した観光開発という地域の現実に合わせて、観光地の観光資源の発見から開発までの過程、及び活用における具体的な影響と原因を論じたい。梧林の観光開発の経由を明らかにする上で、「資産→資源→資本」という分析の枠組みを使い、華僑に関する物語と旧居などがどのように文化、または観光資源として認知されるようになったかを考察する。「資産→資源→資本」の枠組みとは、文化の価値の実現状態についての三つの段階である。生活様式として文化は「資産」と重なって具体的なものを指す。価値の再発見によって文化は対象化される。つまり価値のある「資源」となり、最終的に観光開発などを通じて持続的に価値を生み出す「資本」となる。なお、梧林の観光開発に関する参与主体が多いため、国家／省／市／県政府、村委員会、開発会社、観光事業者、住民、華僑、観光客などの各主体の関わりと認識の差異を整理し検討する。調査方法について、本論文はインタビュー調査、参与観察</p>			

と文献調査を用いて研究する。2024年7月～2025年9月に中国福建省晋江県の梧林という村に政府の関係者、村委員会、開発会社、観光事業者、住民、華僑、観光客とのインタビュー調査を実施し、30件のインタビュー調査をまとめた。この期間中梧林で開催されたコンサートや焼塔祭などの観光イベントも参与観察をした。その上で晋江県の図書館とインターネットの資料を利用し、梧林の観光開発に関する政策文書、新聞、SNS、政府による統計データなどの資料を集めた。以上のインタビュー記録と資料をまとめ、テーマ分析と言説分析を実施した。その結果、梧林が主にわずかな一部の住民によって「資源」として発見され、その上で政府と開発会社によって観光開発が推進されている。梧林の住民の多くは認識と資本金などの原因で、観光地の運営と集客が大きく政府と政府が主催する観光イベントに依存する。つまり梧林が最終的に「資本」として価値を産出する上で、観光事業者、住民、華僑、観光客などが集まってきた。華僑に関するイメージと認識も拡散するようになっている。まとめると、①文化が特定の時代における特定の人々の生活様式の総体として、具体的な「資産」から対象化・意識される時に、時代と人々の主体の変化によってその在り方が変わっていく。②「資産→資源→資本」というプロセスは、文化の価値の再発見と実現の過程である。特に「資源→資本」という文化の価値の実現は、リスクのある投資のようなサイクルである。異なる時代に人々のニーズに応じて、最終的に文化は変容と更なる広範に価値の共有を成り遂げるのである。

※作成に当たっては、文字は10.5ポイントでA4用紙2枚以内とする。